
ふたりをつなぐもの

久喜由名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりをつなぐもの

【NZコード】

NZ8907V

【作者名】

久喜由名

【あらすじ】

十年の付き合いが終わった時、それぞれの胸にあったものは大きく違うけれど、二人を繋ぐものは消えなかつた。

幼馴染から恋人へ、別れを経ても繋がる二人のお話です。

(改)が付いているお話がありますが、

今のところ誤字脱字の訂正のみで、

内容に変更はありません。

別れ…郁（前書き）

初投稿です。
緊張しています。

「もう、いい。」

そう言い捨てて彼は振り返りもせずに部屋を出ていった。一人残され、自分の部屋なのに酷く居心地が悪い。

最近は些細なことで喧嘩になるが、それでも別れが近いなんて思つていなかつた。

今までの人生で、好きになった人は彼だけだつたから。

あの『もう、いい』から早三ヶ月。

電話で仲直りはしたけど、一度も会つていなかつた。こんなに会えないのは初めてのことで、どうしたらしいのか戸惑つていた。

私、
宇田川 郁は見習いコック。
彼、
織田 紘之は国立大の三年生。

年齢は同じなのに社会人と学生だから時間が合わないことが多い、仕事の都合で待ちぼうけさせて怒らせることがよくあつた。

あの日の『もう、いい』も、うちで一時間も待たせたことが原因だつた。

『仕事だから仕方ないじゃない』と納得できないまま謝つたのが悪かつたんだろうか。

昔からケンカすると私から謝つっていた。それでうまくいっていた

から、許してくれたはずの彼が会ってくれないのが不可解だった。

……大学、忙しいのかな。

そんな風にのんびり考えていた私はお出度い女だつた。

彼にとつて自分がどうでもいい存在だということを知つたのは、私が仕事で行けなかつた高校の同級生との飲み会。

遅れて顔を出した彼はすでに酔つていて、皆に私との付き合いを聞かれ

『長く付き合いすぎて妹にしか思えない』と言つていたそうだ。

それを聞いていた子が心配してメールをくれていた。

仕事が終わつてそれを確認した私はすぐにメールをくれた子に電話をすると、皆は一二次会のカラオケに来てるけど、彼は帰つたとのことだつた。

とにかく話がしたくて彼に電話をかけるが繋がらない。

不安で嫌な感じがして居ても立つてもいられず、彼の家に向かう。徒歩十分の距離が酷く遠く感じた。

マンションがある通りに出てすぐ、少し先に見覚えのある背中を見ついた。隣に綺麗な女人。

思わず路地に引っ込み震える手で彼に電話をかけたけど、繋がつたのは留守番電話。

路地から顔を出してみれば、路上で顔を寄せ合ひキスをしていた。そして腕を絡めマンションに入つていく。

それが、十歳からの十年間の付き合いが終わつた瞬間。

頭に血が上り「終わりなんだ」ということしか考えられなかつた。

薄暗い路地裏で、いつも持ち歩いてるメモ用紙に

『今までありがとう。さよなら。』と書きなぐり、

そのメモ用紙で彼の部屋の合鍵を包みマンションの集合ポストに突つ込んだ。

泣きながら帰宅し、段ボールに彼の服や本、その他の私物を詰め込みコンビニから送った。

自分の行動は極端すぎじゃないか、ちゃんと顔を見て話をするべきじゃなか、そう思わなくもなかつたけど、彼からは何の連絡も来なかつた。

だから、きっと、これで良かった。

別れ…郁（後書き）

誤字・脱字、その他不備がありましたら、
ご指摘いただけすると嬉しいです。

別れ…紗之（前書き）

男女交互視点になります。

（今回だけじゃなく、一話」とに交互になります。）

読みづらかったらごめんなさい。

今回だけ（の予定）男性が酷いです。

散々飲んだくれて、女連れ込んで、昼に目が覚めた。
だるい体に鞭打つて昼飯を買いに出かけて、帰りにポストを覗く
と、

『今までありがとうございました。さようなら。』

そう殴り書きされたメモに包まれた合鍵がポストに入っていた。
三ヶ月会つていらない彼女からの三行半だとすぐにわかり、愕然と
した。

五年付き合つてきて別れを切り出されたのは初めてのことだ。

全然会つてなかつた。碌に連絡もしなかつた。

彼女は着飾ることに興味がなく、俺よりも仕事が優先で、何度も体
を重ねても慣れずに痛がる。彼女を喜ばせるにはどうしたらいいか
わからず、いろんな女と出かけるうちに目的を忘れていた。彼女の
仕事に嫉妬して、抱けば痛がる顔が辛く、一緒にいても苛立ち喧嘩
が増えたから他の女といふほうが楽だった。

疚しいことは山ほどあるのに、別れるなんて考えたこともなかつ
たから、電話をするか家に行くか、どうしたもんか考えていたが、
落ち着いてくると別れたほうがいいような気がしてきた。

最近、自分たちは合わないんじゃないかと感じていたし、これか
ら生活環境も変わる。ただ長い付き合いの彼女がいない生活は想像
できない。でも、しかし、を何度も繰り返し、昼飯も食べ損ねて頭
を抱えていたら宅配便が届いた。

ダンボールに、彼女の部屋に置いていた服や本が詰め込まれてい

た。

本気で別れる気などと感じた。

彼女にとつて自分との付き合いは、何の話し合いもせずに別れられるくらいの関係だつたのか。

そのことに酷くプライドが傷つけられた。

そつちがその気なら、とそのままにした。

それでいいと思った。

別れ…紘之（後書き）

すゞしく緊張しています。
文章、おかしなところがあつたら、指摘ください。

最後に彼を見た日から、何がいけなかつたのか考え続けた。

彼の隣にいた女性はミニスカートに艶々の長い髪、女の私から見てもとても綺麗だつた。

いつもショートカットでノーメイク、Tシャツにデニムばかりの私が女性に見えなくなつたのかもしれない。

……浮氣じやなかつたのかな。私のことを忘れるくらい、あの女人が好きだつたのかな。

父がいなくても、母と離れても、彼だけはずつと傍にいてくれると思っていたのに。

酔つていたから。キスだけかも。私から謝れば。自分から別れたくせに、未練タラタラだ。

でも、あのキスシーンが頭から離れない。頭の中が怒りでいつもになる。

もし縫りを戻せても、いつもいつも疑つてしまつ氣がした。だから、もう忘れよう。

そう決心したのに、なかなか好きな気持ちも辛い気持ちも消えなかつた。

眠れない日はお酒で誤魔化し、寝不足と一日酔いでボロボロになつていつた。

仕事でもミスが続き、シェフはそんな私を見かねてある提案をしてくれた。

とある避暑地でレストランをしている長年の友人から『「ツクを紹介してほしい』と頼まれているから、行ってみてはどうか。

新しい職場で心機一転するのも良い経験になるんじやないか、と。私は仕事の忙しさでこの辛さが紛らせることができるなら、と提

案を受け入れた。

彼が小学三年生の時にアパートの隣の部屋に引っ越してきて、離婚で母子家庭という共通点から親同士が仲良くなつた。

学校では知らん顔していたけど、夜まで一人ぼっちの私たちは友達と遊んだ後はどちらかの部屋で一緒にいることが多かつた。

高学年になつて料理を覚え始めると、ほぼ毎日、食事の支度をまかされるようになり、晩御飯は彼も一緒に食べていた。

中学に入ると、顔が整つていて勉強ができてスポーツもそこそこ彼は人気が出て告白されることも増えていた。

その頃、彼に対する気持ちが友情ではなく恋だと気が付いてしばらく嫉妬に苦しんだ。

中学三年生の修学旅行で、同級生から告白されて無理やりキスされそうになつた時、助けてくれたのは彼だつた。

その時、お互に好きだということがわかつて付き合い始めた。高校も同じ所に通えたから、本当にずっと一緒にいた。

私は母から、

「養うのは18歳までだから。それ以降は自立して生きていって。」

そう言われていた。

不況で就職は難しいから手に職をつけようと考え、一番身近で、修行にお金がかからない調理師に決めた。

近所のレストランで厨房の下働きとホールの仕事をさせてもらい、それを高校三年間続け、卒業後にコックとして採用してもらえた。母は高校卒業と同時にアパートを出て行つた。

彼は高校の途中から父親の援助で立派なマンションに引っ越してしまつた。

それに進学の目標が国立大だったから受験勉強が忙しかつたり、進学後も毎日一緒にいられないけど幸せな日々だった。

部屋の中は、どうもかっこも思い出だらけで、ガラクタみたいなものでも捨てるのがつらかった。

でも新しい部屋もそう広いわけじゃなし、未練はここで捨てていくつて決めたから。

彼にもらった物は一つだけ。

付き合い始めて最初に貰ったプレゼントだけは一緒に連れていくことにした。

引越し… 郁（後書き）

三日ぐらいで、と言いつつかけたので投稿します。
各話、文字数がバラバラですが大丈夫でしょうか？

引越しを明日に控え空っぽになつた部屋を見回すと、たくさんの思い出が甦つた。

「早番だから二十一時には帰れるよ」

半年前のある日、彼女から連絡もないまま二十三時近くになり、迎えに行こうとしたところで、

「人が足りなくて抜けられなかつた」と帰ってきた。

前にも何度も同じことがあり心配するから連絡は入れると言つたのに、歩いて十分の距離だからと電話をかける手間を惜しむ。

『仕事だからしうがないでしょ』という的外れな言い訳が透けて見える謝罪に苛々が収まらず、「もう、いい」と部屋を出てしまつた。

一晩経てば冷静になり電話で仲直りしたが、なんとなく会いたくなくて遊び歩いていた。

そんな時、離婚の際に父に引き取られた兄が失踪した。

父は手広く事業をしていたため後継者が必要で、兄の代わりに、と相談された。

今まで放つて置いたくせに、と反発する気持ちもあつたが『父に認められたい』という思いは強かつた。

だから、父の申し出を受け入れた。

戸籍も家も変わる。大学に通いながら、会社のことも学ばなければならぬ。

社会人の彼女に合わせていたけど、これからはそつもいかなくなつる。

だから別れるのは必然だつた。

何故かわからないけど、彼女に振られたことを必死に受け入れよ

うとしていた。

十年も一緒にいたから、思い出の品物はたくさんあったのに、何一つ残さずに処分した。

誕生日プレゼントのCD。

バレンタインの手編みのマフラー。

合格祝いの鞄。

マンガ、写真集、小説。

お揃いのフォトフレーム、ペアの指輪。

アルバムも捨てようとしたら、母が奪つていった。

一人ぼっちになつてしまふ彼女を心配な気持ちはある。

でもしつかりものだし、きちんと生活していたから、自分なんか

いなくても大丈夫だらう。

俺は適当に遊ぶほうが性に合っている。

少しの未練と、たくさんの思い出は、ここに置いて行くことにした。

引越し……紹介（後書き）

お気に入り登録、評価、どちらもありがとうござります。
とても嬉しくて張り切って書いています。
でもちょっと落ち着いたほうがいいですね。
家族が夏休みなので、次話は火曜日更新したいと思います。

レストランにて 郁（前書き）

郁視点。

八年後に飛びます。
飛びすぎですか。.

レストランにて…郁

「じつちハンバーグあがつたぞ」

レタスとトマト、ポテトサラダを盛った皿にハンバーグを乗せ、デミグラスソースをかける。

パンかライス、日替わりスープ、コーヒーか紅茶という組み合わせで八百五十円。

『restaurant pomme de terre』（レストラン ポム・ド・テール）
一番人気のハンバーグセット。

ランチタイム最後のお客さんは、常連の上川さん。いわゆるお節介が大好きな、どこにでもいるおばあちゃんだ。

おばあちゃんだけ、ハンバーグが大好きで週に二回は店に来る。この店の店主、シゲさんこと重森満生の漬物の師匠で、漬物の他にも土地の料理を教えてくれたそうだ。

だからシゲさんは上川さんに頭が上がらない。

その師匠から三ヶ月という期間、デリバリーを依頼された。

「私とお父ちゃんと管理人して別荘の人にな、持つてつてほしいのよ

作るのは一人分。

二十八歳、男性、。

好き嫌いは特に無し。

持つていくのは夕食のみ。

定休日以外の週六日。

変更があれば、配達の際に本人から。

うちの店にテイクアウトは無い。もちろんデリバリーも。レストランと名乗つてはいるが、素朴なログハウスの外観も相まって食堂と呼ぶほうがぴったり……。

ちなみにポム・ド・テールはフランス語でじゃがいもだ。シゲさんの奥様の実家でじゃがいもを作ってる。いも好きの奥様が命名されたそうで、メニューもじゃがいも料理が多い。常連さんには『いも屋』と呼ばれています。

たまに誕生日パーティーや、結婚式の一次会に使われたりもするけど、こんな依頼は初めてだしイレギュラーすぎる気がしたが、シゲさんは迷わず引き受けた。

「都会の坊っちゃんの口に合うかわからんけどな。師匠の頼みは断れねえ。郁とノリも協力しろよ」

「女の子だつたらよかつたのに。でも郁ちゃんと同じ年か。アラサーは女の子じゃないな」

そう言われて嫌だと言える私ではなく、ノリーと重森紀一も軽口叩きつつも了承した。

できれば今日からでもという話なので、今日は無難にハンバーグとポテトサラダ、ご飯、コンソメスープにした。

六時上がりの早番が届けることになり、今週はノリが担当だ。

今日は土曜日だから明後日には私の番になる。

シゲさん、引き受けたくせにこちらに丸投げとは……。

献立、日替わりランチと一緒にダメなのかな。

そういうえば予算はいくらなんだわ。

考え始めると、いろいろ出てきてしまったのでメモを取り、悩むのは夜にすることにして仕事に戻った。

次の日。遅番の私は十時に出勤するとノリに話を聞きに行つた。話題はもううんざりバリーのことだ。

「それがさ、全然愛想の無いやつだわ」

名前は藤倉。お酒臭く、顔色は悪く、ぶつきら棒だったそうだ。次からは門の前に置いて、一度インター フォン押していけ、使つた容器は次の日までに門に置いておく、とのこと。

「せつかく届けてやつたのに、ありがとの一つもなくてさ。叔父さんもなんであんなの引き受けたんだか」

なんて愚痴るノリを、ボランティアしてるんじゃないんだから、と宥めつつ、

そんな人なら顔を合わせないほうがやりやすいんじゃないかなと思う。

でも何で夕飯だけなんだわ。

朝と昼はどうしてるんだね。

会つたこともない人なのに、何かいろいろと気になる。

ノリと今日のメニューを相談して決める。

ビーフシチュー、ジャガイモとセロリのガレット、ベビーリーフとナツツのサラダ、茸のパスタ。

肉肉魚肉肉魚。

このリズムで行つて、様子を見る。話せそつならリクエストを聞く。

せっかく作るんだし、美味しく食べてもらいたい。

仕事を終えて帰宅すると、いつもはまずシャワーに入るけど今日は本棚に向かう。私の本棚は料理の本ばかりだ。

基本、初心者用、プロ用、お菓子、カレー、パン、和菓子、飲み物。

フランス、イタリア、北米、中国、東南アジア、南米、北欧。

いろんなタイプの本がある。食べ物の写真を見るだけで幸せになれるから、ついつい集めてしまう。

その中からお弁当の本を何冊か手に取つてテーブルに並べた。

お店で出す料理は、お店で食べるから美味しいんだと思う。

誰といふのか、一人のかもわからなけれど、ちゃんと温めているのか、お皿に移しているのか。

あの容器のまま、少し冷めた料理を一人で吃るのは虚しいんじゃないかな。

毎日吃べるなら、家庭料理のほうがいい。レストランのメニューはどうしても偏りが出てしまう。

だから、大人の男性の夕飯になつてお弁当を考えるための参考に本を開いてみた。

お肉が続いているから、明日は魚の日だ。金田鯛にしようか。
魚の次はお肉だからメンチカツ、次の日は定休日の水曜日。
木曜日は生姜焼き、金曜日は鯖味噌。
土曜日は酢豚。日曜日は鶏そぼろご飯。

お弁当として考へると、すらすらメニューが決まる。

一週間のメニューを便箋に書きとめ、月曜日に入れることにした。

誰かにお弁当を作るのは、とても久しぶりのことだつた。

仕事だけ少し楽しい気分だ。

シャワーを浴びながら、毎日お弁当を作っていたことを懐かしく思い出す。

唐揚と卵焼きが入つていれば、他には何にもいらないと言つてい
た彼は、今どうしてるだろう……

月曜日、早番なので五時起き、六時出勤。愛車はボロボロの軽ト
ラック。

店先と店内の掃除の後、冷蔵庫をチョックしてお弁当の材料を確
保。

これから来る魚屋さんに金田を追加発注して、通常業務に戻つた。

十五時からお弁当作りに取り掛かり、十八時に店を出る。ノリが
描いてくれた地図を頼りに藤倉さんの家に向かつ。

いつもよりやることが増えるのは刺激がある分、少し疲れる。

そのうち慣れるかな、でもその前に三ヶ月は過ぎてしまいそうだ。

店から十五分くらいで着いた家は、白く大きなお屋敷だった。

門から家まで学校のプール一個分以上ありそつだ。
大きな門の傍に通用口があり、見慣れた食品用のコンテナが置い
てある。

隣に、今持つてきたコンテナを置き、インターフォンを鳴らした。

……。

しばらく待つても、応答はなかつた。ドアから誰かが出てくる氣
配もない。

食べ物を、こんな無防備に置き去りにするのは落ち着かないが、
藤倉さんは顔を合わせたくないようだ。

しぶしぶ、昨日のコンテナを回収して立ち去つた。

帰宅すると最初にコンテナの中を確認した。料理の入つていた容
器は綺麗に洗われていた。

想像よりもきちんとした人なのかもしれない。

いつものようにシャワーを浴びてから、夕飯の支度をする。
たつぶりのレタスとタマネギ少々、ハムとチーズのサンドイッチ。
ベーコン、タマネギ、ニンジン、蕪のコンソメスープ。
サンドイッチにかぶりつきながら、藤倉さんも美味しく食べてる
といいな、そう思った

レストランにて… 郁（後書き）

ぎつぎり火曜日に投稿できました。
遅くなつてすみません。

お気に入り登録、評価、感想、ありがとうございます。
お気に入りが増えているとドキドキします。

サブタイトルつけるのがこんなに難しいとは…

担当変更… 郁（前書き）

お待たせしました。
今回は郁視点になります。
口口口口変わっていめんなさい。

—名様限定の「テリバリー」サービスを始めて一ヶ月と少し。

「これ

十時に出勤した私に、不機嫌な態度のノリが差し出してきた一枚のメモ。

『配達していただいている料理の件でお願いがあります。
一週間ごとに味が変わるようになります。
先週の味付けを続けていただけませんか。
よろしくお願いします。』

今週はノリが当番、ということは、私を『指名つけて』こと。

「これでもさ、いろいろ考えて作ってたんだけど。やっぱ年の功には勝てないか」

「年の功つて……ノリとは七歳しか違わないのに」

軽口で誤魔化してゐるけれど、結構悔しいみたい。

不慣れな仕事だったけれどちゃんと取り組んでいた。

でも、どんなに好きなお店の料理でも毎日食べていたら飽きたと

思うし、

氣に入られるほうが珍しいと思つ。

「郁がここに来て、もう八年だもんなあ。来た時はピチピチの二十歳だったのに……」

「来年厄年のシゲさんは言われたくありません」

「ナイスミードルに向かつて失敬な」

少し硬い雰囲気になつた私たちを、いつもの態度で元通りにしてくれるシゲさんは、良い上司だ。

末っ子で甘つたれ氣質のノリに、一人っ子でマイペースな私という使い難い人間の扱いが本当に巧い。

柔らかくなつた空気にほつとしていたら、『リバリー終了』まで一人で担当してほしいと言われた。

通常業務ならノリもできなきや困るけど今回は特別だし、何より『指名だからな、と。

「味が氣に入られるなんて、嫁に貰つてもうえるんじやないか」

豪快に笑いながら背中をバンバン叩かれ、この話しさは終わつた。早速交代することになり、仕入れの関係もあつて今日はノリのメ

メニューで行くことにした。

今日は鰯の西京焼き。ふわふわのだし巻き玉子と、ほつれん草のおひたし、里芋の煮物。

『毎度ありがとうございます。』

poème de terre の 宇田川と申します。

これまで調理師が交代で担当していましたが、今日から宇田川が担当させていただくことになりました。

藤倉様にご満足いただけるよう精進いたしますので、何かありますらご指摘いただけすると幸いです。

また、メニューのリクエストなどありましたら、御遠慮せずお申し付け下さい。』

午後の休憩時間に急いで作った今週分の献立表と一緒に手紙を入れた。

メニューを考えるのも一苦労なので、リクエストしてくれたら嬉しいのに。

まだ藤倉さんの顔も見てないし、声すら聞いていない。会ったことも話したことも無い人に、毎日料理を作るのは結構辛い。何が好きで、何が嫌いなのか。朝、昼はどんな食事をしているのか。気になるけど、知りようがない。

毎回綺麗に洗われている容器が恨めしいような気持ちになる。

私の味も、そのうち嫌になられたらどうしようか……。

そんな不安を抱えながら配達に向かった。

次の日。

回収したコンテナの中に入っていた。

『お気遣いありがとうございます。毎日、今日のメニューは何かと
愉しみにしています。

いつでもいいので、鳥の唐揚、甘い卵焼き、ポテトサラダをお願
いします』

藤倉さんがくれた初めてのリクエストは、私にとっても懐かしい
メニューだった。

昔は何度も作つたけど、今は全然作らなくなつてしまつたメニュー

。

何となくだけど、仕事を始める前に作つていた味で作つてみたく
なつた。

そして、次の日に早速そのメニューを持って行くと、

『とても懐かしい味でした』

翌日、そう書かれたメモが入つていた。

それからは、月曜日を持って行く献立表に少しの言葉を足すようになり、

藤倉さんからも返事が来るようになった。

料理のリクエストだったり、この土地の話だったりした。短い文章のやり取りが、とても楽しくて私は少し浮かれていた。

藤倉さんは大きな別荘に住んでいたのに、案外庶民派のようだ。だから私の作る料理も口に合うのかもしない。私が一人で担当し始めて一週間が過ぎる頃には、

鳥の唐揚が一週間に一度の定番メニューになっていた。

お祝いの日でも、そうじやなくても、何が食べたいか聞くと必ず『唐揚』としか言わなかつた紘之。

ここに来て八年。

ここに来る切欠になつたのは紘之との別れだつた。辛かつたし、たくさん泣いたし、忘れないとも思つたけど、忘れなかつた。

今はちゃんと眠つて、しつかり働いてるけど、誰にも心が動くことはなかつた。

それなのに、顔も見たことのない藤倉さんが気になつてしまつなかつた。

担当変更、… 郁（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
時間がかかるつてしまつて申し訳ないです。
三日に一度と言いつつ、一週間に一度になつてつです……

失敗…紘之（前書き）

紘之視点。

『引越し』から八年後です。

場面転換が多いので、わかり辛かつたら「めんなさい」。

通話の切れた携帯を握り締めたまま突っ立っていた。

どれくらいそうしていたかもわからないくらい、我を失っていた。
この一年、必死に取り組んだ仕事が無に帰した。
自分を認めさせる為にも、絶対に成功させなければならなかつた
のに。

兄の代わりに会社に入つて六年。ずっと比べられてきた。
結果を出しても評価してもらえないのに失敗など許されるわけが
ない。

今回のプロジェクトは、内部の人間によつて潰された。
父は、失態を重ねた自分を見限るだろうか。最近行方のわかつた
兄を呼び戻すかもしれない。
これからのことを考えると頭が痛かつた。

今回の件で企業スパイだつた人間を処分できたが、良いこととい
つたらそれくらいのものだつた。

この一年は不眠に悩み、酒に頼る日々が続いていて、体調があま
りよくなかった。

疲れきつて帰宅すると、父と兄が和やかに食事をしている。

「仕事、頑張つてるんだつてな。」

穏やかに話しかける兄の笑顔が、こんな日に兄と食事をしてゐる父
が、無性に腹立たしかつた。

「お前のせい……」

そんな言葉が口を突いて出た。

「俺がどれだけ苦労したかわかるか。わかるならここにいるはずないか」

憐れむように顔をしかめた兄の胸ぐらに掴みかかったが、殴りつけ振り上げた手は父に押さえられた。

父の手を振り払い自室に戻ると、瓶のまま酒を一気に流し込む。気付いた時には瓶は空になつていて、

どれだけ飲んだか自覚した途端、酷い目眩に襲われベッドに倒れ込むと意識を失った。

目が覚めると病院だった。

嘔吐して意識の無い自分を、部屋を見に来た父が発見し救急車で運ばれたそうだ。

『仕事のことは考えなくていい。空気の良い所に別荘があるから、ゆっくり体を休めていい』

休みなんかいらない、そう言い張つたが通らなかつた。

病院のベッドの上で、無力感に苛まれた。

兄にしたことは完全にハツ当たりで、自分の馬鹿さ加減に心底うんざりした。

他の誰よりも、自分自身が兄と比べていたのだ。

兄のお陰で巡ってきたチャンスを生かせなかつた。

父に期待されて嬉しかつた。完全に舞い上がつていた。育ててくれた母を捨て、ずっと傍にいた幼馴染を捨て、何も残つていなきことに今氣付いた。

父の元から、兄と同じように逃げたとして、また同じように穏やかに食事ができるとは思えない。

父の元に行くことに反対していた母の元にも、もつ戻れるとは思えない。

全ては己が招いたことだが、どうしようもなく独りだといつことを噛みしめていた。

何もかも父の手配で事は運び、一週間の入院後、山に追いやられた。

でかい一階建ての屋敷に一人きり。訪ねてくるのは通いの家政婦と、別荘の管理人夫妻。

皆、年寄りだからか、田舎の人だからか、世話を焼くのが好きなようだが鬱陶しかつた。

何もする気が起きず、飯も喰わずだらだらと酒を飲んです」として
いふと、管理人の妻のほつからある提案をされた。

「つまゝ夕飯を食べれば、うまい酒が飲めるし、よく眠れるだろ」

近所のレストランから、デリバリーしてもらつとこつ。

普段はデリバリーはしてないらしいが、話をつけてくれたそ�だ。
自分にはどうでもいいことだったから丸投げしていたし期待もし
ていなかつたが、

これが自分を見つめ直す機会になるとは思つてもみなかつた。

とりあえず二ヶ月、と決められた療養期間が始まつた。

失敗…紘之（後書き）

お気に入り登録が百件超えてました。
驚きです。ビックリです。
ありがとうございます。
更新遅くなってしまって、すみませんでした。

引きこもつゝ 紘之(前書き)

引き続き紹介視点です。

更新遅くなつてごめんなさい。

「」の別荘に来て一週間が経った。

週に一度かかってくる父からの電話。

月曜日と木曜日に入る通いの家政婦、
二谷さん。
二谷さん

ほぼ毎日毎週^{まことに}来る上川の婆さん。

何もする気が起ら^らず、時間に關係なく酒を飲み、だらだら過ごす。

飯は食つたり食わなかつたりで、二谷さん^{まつや}に買つてきもらつたもので済ましていた。

父から『とりあえず三ヶ月休め、仕事の話はそれからだ』と言わ^れ、それも無氣力の要因になつていた。

療養で来ているはずなのに、気持ちは塞^{ふさ}ぐばかりだ。

余りにもだらしない生活に上川の婆さんがあきれ果て、夕飯の手配をするといつ。

何度も断わると父に連絡され、電話で叱^{しか}られるところ情けないことになり仕方なく受け入れたが、届いた食事はなかなかの物だった。

届けに来たのは若い男で、お世辞にも愛想がいいとは言えなかつた。

毎日会いたいと思えるわけもなく、次から置いていくつひに立た^たる。

上川の婆さんの行きつけの店だそうだが、どんな店なのか少し気になるが出かけて行く気にはならなかつた。

あいかわらずの「引寄せ」もり生活を過ぐす中で、夕食が楽しみになつていた。

一週間「」とに弁当が代わるのか、メニューや味付けが全く違つたものになる。

いかにもレストランといつものと、一般家庭の飯、飯といつか弁当のようなもの。

どちらも美味しいが、食べてほつとするのは後者だった。
朝は食べず、昼は三谷さんが買つてきてくれたパン、冷凍食品、カツップラーメン。

上川さんに『家政婦に食事も作らせればいい』と言われたが、長時間、家の中にいられるのが嫌だつたから断つた。
唯一のまともな食事だからこそ、我儘な提案を申し出てみた。
弁当みたいなほうだけにしてくれ、と。

断られるかと思いながらした提案は受け入れられ、望みの食事が食べられることになつた。

担当者の宇田川さんは、さつそく手紙をくれリクエストも受けてくれるらしい。

早速、鶏の唐揚、甘い卵焼き、ポテトサラダをリクエストしてみた。

弁当。
宇田川。

ずっと忘れていた思い出が蘇る。

別れて八年経つ元彼女が作ってくれた弁当。

祝い事の時は、必ず鶏の唐揚が出た。

料理の苦手な母より、俺の中の母の味といったら郁の料理だった。

今頃どうしているんだろう。

自分勝手に振舞つて振られてしまった。別れを切り出された時、追いかけもせず……。

散々浮氣して、女と付き合つなんて簡単だと思つていたのに、郁と別れた後は誰とも長く付き合つことはなかつた。

仕事にのめりこんでいたここ数年は、付き合つてすらなかつた。こんなところで燻つている俺を見たら、郁はどう思つだらう。

いつでもいいと書いたのに、リクエストの翌日で書いた夕食は懐かしさでいっぱいだつた。

その日は子供の頃のことや、郁のことを思い出しながら、久しづりに酒に頼ることなく安眠できた。

彼女の教えてくれる店にはハズレが無く、また来ようと思える所ばかり。

店だけじゃなく、勧めてくれたものも当たりが多く、友人になれるんじやないかと思つてしまつ。

教えてもらつことばかりだつたが、宇田川さんとのやり取りは心地よいものだつた。

外に出る機会が増えるにつれ酒の量も減り、食事を摂るようになつたせいか体調も良くなり、ずっと田を背けていた自分自身の問題とも、少しずつ向き合い始めた。

宇田川さんが、手紙に書いてあつたことから女性だと知つてはいた。

一度、配達の時間に窓から覗いてみたが帽子をかぶつていたし、薄暗くてよく見えず……。

服装はTシャツにデニム。年齢はどれくらいだろう。

手紙では二十代か三十代、落ち着いた大人の女性、という印象だつた。

人と接する機会が少ないせいで人恋しくなつてゐるんだろうか。

彼女が気になつてしかたない。

上川さんに頼んで店に連れて行つてもらおうかと思つていた矢先、読書に夢中になりソファで転寝した夜、急激な冷え込みで風邪をひいた。

熱が出て、咳がとまらない。頭痛も酷い。だるくて動けず寝込んでいると、独りきりということが沁みてくる。

薬の場所もわからないから眠ることに専念していると、昼過ぎに訪れた上川の婆さんに発見され病院に連れていかれた。

患者は少ないようで、すぐに診てもいた。

たんなる風邪だから、暖かくして、きちんと食事を摂り、薬を飲むこと。

すぐに診療は終わり会計を待っていた。
ベンチに腰掛け目を閉じて俯いていると、隣に座っていた上川の婆さんが誰かと話し始めた。

「ノリ、どうしたの」

「大したことないんですけど、ちょっと火傷しちゃって」

「そりゃ大変だね。郁ちゃんは付き添いかい

「」の手じゃ運転できないですからね。上川さんはどうされたんですか」

「郁ちゃんと同じ付き添いでね、この人の」

「あ……、藤倉さん」

郁ちゃん、上川の婆さんはそう言った。

反射的に目を開いて顔を上げると、婆さんの前に一人の男女が立っていた。

男に名前を呼ばれたが、目が女に吸い寄せられて離れない。

「シャツにデニム、きつちりポニー テールに結った長い髪、俺を見て驚きに見開かれた瞳。

自分も驚きすぎて声も出せず、八年で女はここまで変わるものな

のか、そんなことを考えていた。

お気に入り登録、評価、じかんもあつがとひりやること。

ご飯であつたり立ち直りすぎかと。あつたり再び立ち直りかと。
ちよつと歎息でしました……。

驚愕…郁（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。
ごめんなさい。

今回は郁視点に戻ります。

『とても良い雰囲気のお店ですね。』

『宇田川さんのお勧め、良かったです。』

『次に行く時には、天気が良ければテイクアウトして公園で食べた
いですね』

藤倉さんからの返事は、いつも楽しげだった。

文通……と言つていいのだろうか。このやり取りを何て呼べばいい
んだろう。

そんな風に悩む瞬間もあつたけど、続けることを躊躇つ気持ちは
なかつた。

私がお店や料理を教えるかわりに、彼は映画や本を薦めてくれた。
そのお勧めの中に私も大好きな小説があり、しばらくの間、その
話一色になつたりもした。

彼のリクエストに答えつつ、健康にも気をつけたメニューを考え、
朝や昼のアドバイスもした。

『情けない理由でここに来て、酒飲んで時間をやり過すつもりだつ
たけど、

宇田川さんの『ご飯でいろんなこと思い出しました。』

子供の頃の懐かしい味のお陰で、少し前向きになれました。毎日
ありがとうございます。』

唐突にそんな返事が来たときは、かなり驚いた。

そんな風に思つてくれて嬉しかつたし、それを打ち明けてくれたことも嬉しかつた。

味覚や趣味が似ていて、親近感を強く感じるようになつていた。会つて話がしたい。顔を見てみたい。

でも藤倉さんにとつたら、私なんて、ただの『ご飯担当』でしかない。しかも三ヶ月の間だけだ。

あと一ヶ月とちょっとしたら、この繋がりは切れてしまつ。それを考へると、とても切ない気持ちになつた。

急に冷え込んだ次の日。

お昼にやつてきた上川さんは、いつものハンバーグセットを完食すると、この後藤倉さんの所に行くと言つ。

来た頃に比べると、随分健康的になつてきたそうだ。

訪ねて来る人がいないうそで、自分が行つてあげないと、と笑つていた。

そろそろランチタイムの混雑も落ち着いてきた頃、私はオムライスを、ノリはポークソテーを作つていた。並んでフライパンを振つていると、

「兄さん……」

カウンターで知り合いと話していたシゲさんが唸るように言つた。

隣のノリが反射的に振り返り、フライパンをガス台に置いたままカウンターに近寄る。

「何しに来たんだ」

いつものノリとは違う低い声。

私の位置からではカウンターの向こう側が見えず、何が起こつているのかわからない。

シゲさんのお兄さんは、ノリのお父さんだ。

大学受験の失敗と、将来の進路で揉めていたと聞いたことがある。仲直りに来たのだろうか。

「もういい加減、気が済んだだろう。そろそろ戻つてしまらどうだ。こんな所にいたつてしまふがないだろう」

カウンターの向こうの人は落ち着いた声で話しかけた。

でもその問い合わせにノリは答えず、こちらに戻つてきた。

オムライスを完成させた私はポークソテーの面倒をみていたけど、戻ってきたノリにその場を譲り、出来たものを運ぼうとした瞬間、

「あつ」

叫び声と、フライパンがガス台に当たる音。振り返ればノリが床に蹲つていた。

素手でフライパンの柄を掴んで、手のひらを火傷したようだ。肩を叩いて水で冷やすように言い、無事だったポーカソティーを盛り付け、オムライスと共にシゲさんに任せノリの手を見に行く。大丈夫かと声をかければ、無言で頷く。でも掌は悲惨なことになつていた。

シゲさんにも見てもらいたい病院で見てもうたほうがいいだろ、といふことで私の運転で送ることにした。

車の中でノリは頑垂れていた。

「みつともないとこ見られた……くそつ」

父親にドジを見られて落ち込んでいるらしい。病院に着くまでぶつぶつ文句を言い続けていた。

両親との繋がりが薄い私からしてみれば、どんな事情があるひとつも、忘れずに会いに来てくれるのは羨ましい。

私と母なんか、十年会っていない。引っ越し時に連絡を取り合つ程度だ。

だから少しいじけた気分になつていた。

父も、母も、姉之も。
みんないなくなつてしまつた。

自分が大切だった人達にとつて、自分が価値のない人間だつたと
思うのはとても辛いことだ。

一人ぼっちだと思いたくないけど、現実には孤独だつた。
困つたら手を貸してくれる人はいるけど、心を預けられる人は長

い間いないま。

だから、親や肉親に守られているのに、小さなプライドが傷ついたと憤つてるノリに、早く気付いて欲しいと思つ。理解されなくて怒つたり、悲しんだりできるのは繋がつてゐるからなんだと。

病院に入ると待合室は空いていた。

受付の手前のベンチに、上川さんが座つていた。背の高い男性が隣に座つてゐるが、俯いていて顔が見えない。

上川さんは、手に氷嚢を押し合てたノリに声をかけ、隣を指差しながら自分も付き添いだと語つ。

その男性が顔を上げると、私の目は彼に釘付けになつた。

「あ……、藤倉さん」

ノリがぼそつと語つたが、頭が理解することを拒んでゐるみたいだ。

八年会つていなかつたけど、すぐにわかつた。

織田紘之。

ボロボロになるくらい、別れが辛かつた、大好きだつた人。彼が藤倉さんだなんて……。

驚愕…郁（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
更新が無いのに増えていて感激です。

大体の筋書きは決めていたのに、とても迷ってしまいました。
結末は迷っていないんですが…。

再会（前書き）

前回更新より一ヶ月以上かかってしまいました。
ごめんなさい。

再会

頭の中が真っ白になつた。

目の前の人と、『藤倉』という名前が結びつかない。何も言えずにいる私を、彼はじつと見つめている。

どれくらい見つめ合つていたのか。

肩を叩かれ振り向くと、ノリが診察室に入ると言つてきた。その時、彼も会計から呼ばれ席を立つた。

その姿を目で追いながら立ち尽くしていたが、声をかけられて我に返つた。

「藤倉さんとはお知り合いだったのかい」

返答に困つている内に上川さんが立ち上がる。

「ノリ、酷くないといいね。じゃあ、私たちは失礼するよ」

私の肩をぽんぽんと叩いた上川さんに頭を下げ、一人が入り口に向かうのを眺めつつベンチに腰掛けると、彼が自動ドアの手前で踵を返し戻ってきた。

「今日の配達の後、少し話せないか」

緊張した面持ちと掠れた声で問われ、思わず頷いていた。
じゃあ後で、と言つて去つて行く背中を見送り、ノリの治療が終
わるまでぼんやりしていた。

ノリの火傷は十日くらいで治る見込みとのことだった。ただ水疱
なんかもできているらしく、しばらくは左手は使えないらしい。
物をつかめない、水に濡らしちゃいけない、といふことは利き手
ではなくても仕事にならないということだ。

ノリが治るまで彼と話す時間は作れないかもしれない。その予想
を、とても残念に感じていた。

シゲさんに電話報告してから急いで店に戻ると、ノリの父親は帰
つてしまっていた。

あの状態じや冷静に話せなかつたかもしれないが、あつさりした
態度に驚いてしまう。

そして、ノリの代打にシゲさんの奥様『景子さん』が来てくれて
いた。

景子さんは開店当時厨房に立つていたので、心強い助つ人になつ
てくれる。

四歳と一歳のお子さんをお姑さんに預けることになるので、景子
さんが早番、私が遅番になつた。

藤倉さんの『デリバリー』に関しては、私が作り、景子さんが届ける
ことに決めた。

ノリはとりあえず一週間休み、後は火傷の治り具合をみて決める
ことになつた。

早速今日から遅番なので、夜の分の仕込みをしながら藤倉さんの分を作る。

まだ、私の中の藤倉さんと彼は結びつかない。でも昔を思い出すと、風邪をひいてもいつも「」飯はしつかり食べていた。

蕪のスープ、茹で豚に生姜と長ネギのタレをかけたもの、キャベツのおひたし、柔らかめの「」飯。

それと保存用の瓶に、蜂蜜と生姜のスライスを入れたもの。子供の頃から風邪の時には、これをお湯で割つて飲んでいた。覚えてるかな。

『今日、行けなくなつてしましました。ごめんなさい。

スタッフの一人が怪我をして、最低一週間は時間が取れません。調理担当は私が担当しますが、配達は別のスタッフが担当します。また仕事が落ち着き次第、連絡いたします。

『自愛ください』

手紙を書きながら、『』へ当たり前のように彼に会おうとしていることを疑問に思った。

思い返せば、最低の別れ方だった。ちゃんと話そうとしなかった自分も悪いが、彼も別れ話さえしに来てくれなかつた。

この土地に来る原因だったのに、ここで再会するなんて……。

ノリの父親が尋ねてきたことも、少し関係あるのかも知れない。

私には誰もいないんだな、と考えてしまつたから。

彼とずっと一緒にいたから他人に友達を作ろうともせず、母と離れる時でさえ孤独感に苛まれることもなかつた。

『友達でいいから』

『ただの幼馴染でいいから』

何度もそう思つたことか。でも無理なのは自分が一番よくわかつていた。

彼が他の女性と一緒にいることに耐えられたわけなかつたから。

苗字が変わつてること。

荒んだ生活をしたこと。

気になることはあるけど『話そひ』と言われたことが、とても嬉しかつた。

今この彼に彼女はいない。辛さを分け合つ友人もいない。

それを文通もどきでわかつていてから、気兼ねなく話せると思つたのだ。

交わしたやう取りで懐かしいことを思つて出すのも当然のこと。

藤倉さんが気になつていたのは、結局『彼』だつたから。

それに行き着いたとき、少し苦しくなつた。

彼との別れが辛かつたから、なかなか誰も好きになれないんだと。だけど彼にしか気持ちが動かないのだとしたら。

……元彼相手に、何考へてるんだろ？。

あまりにも突然のこと、冷静さを失つてるんだ。彼も寂しい生活で人恋しいだけなんだ、きっと。あと一ヶ月で、ここからいなくなる人なんだから。

『蜂蜜生姜、ありがとうございました。これも懐かしい味です。風邪も治りました。』

今日は本当に驚きました。

宇田川、とうとう前を見た時に頭に浮かんだのは郁だけど、まさか本当に郁だったなんて、すごい偶然です。届く料理に懐かしさを感じるなんて、郁の味を覚えてたんだな。

もう一度と会えないと思つてたけど、再会できて嬉しいよ。せつかくだから少し話したいです。

時間が作れる日を待っています。 紘之』

別れた時のことを考えれば素直に喜んでいいのか疑問だけど、私も少し浮き足立つてる。

でも素直に嬉しいなんて態度は見せたくなくて、手紙の文章はすこし畏まって書いてしまった。

風邪は治ったか、仕事の調子はどうか、お互いにそれを繰り返し聞くうちに一週間が過ぎた。

再会（後書き）

次回はもっと早く書けるように努力します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8907v/>

ふたりをつなぐもの

2011年11月26日21時45分発行